

＜別紙2＞ランナー決定者の聖火リレーへの意気込み

※走行市町毎五十音順

■加藤 拓三 （走行市町：中津川市）

新潟県佐渡島にある太鼓芸能集団「鼓童／KODO」にて、能・狂言・太鼓・篠笛・能楽・舞踊・民謡・茶道・華道・書道、農業・漁業などに触れ、古き時代から育まれてきた文化・礼儀・作法・知恵、日本の心を学び、2008年和太鼓界では世界最高峰とされる「東京国際和太鼓コンテスト・大太鼓部門」で最優秀賞を受賞。育った故郷、恵那市への感謝の気持ちで市内1,068軒の家々を回り、人と地域の絆をつなぐ演奏をしました。以後、ぎふ清流国体にて天皇皇后両陛下、ぎふ清流大会・育樹祭・農業担い手サミットにて3度、皇太子殿下の御前演奏を行う。太平洋・島サミットでは16カ国の大統領、また、総理官邸に和太鼓奏者としては初めて招待され演奏。伊勢神宮や熱田神宮での奉納演奏。恵那市の観光大使をはじめ、岐阜県に3つある歌舞伎小屋のひとつ「常盤座」の名誉館長に就任。中村勘九郎さん、七之助さんに続く3人目。日本の伝統文化を発信し続けたい。

■島崎 七海 （走行市町：中津川市）

私は、今回の聖火ランナー募集地である馬籠宿で長野オリンピックの年に生まれ、大学に入るまでの間を過ごしました。幼い頃は不便な田舎に生まれてしまったと思っていましたが、高祖父である島崎藤村の事や木曾の歴史を学ぶうちに、この地域を守って行かなくてはならないという使命感を感じ始めました。そのためにか行動しようと思い、高校時代は外国人向けの馬籠観光案内通訳を、通っていた高校の有志で集まった学生と共に、ボランティアを行っていました。大学生になった今は馬籠に少しでも貢献したいと思い、イベントがあるたびに地元の観光協会の方達の運営の手伝いをしています。大正時代からある実家の喫茶店も、後々継ごうと考えております。18年間歩き続けたこの思い出深い坂を、これからの馬籠宿を担ってゆく立場としてどうしても走りたいと思い、応募に至りました。

■竹下 景子 （走行市町：中津川市）

岐阜県恵那市明智町にある日本大正村の三代目村長を拝命して5年目、他にも全国植樹祭や育樹祭、また関ヶ原の古戦場を舞台にした「関ヶ原ナイト」など様々な場面で岐阜県とのご縁をいただいています。現地に赴くたびに「木の国山の国」の美しさ、そして東西の要衝として幾多のドラマが生まれた歴史を知ることができました。このたび、オリンピックの聖火リレーにランナーとして参加させていただきます。晴れがましいことです。この晴れの舞台で岐阜県の魅力を多くの皆様にご覧いただくとともに、岐阜県からも2020東京オリンピックが盛り上がりそうですよう力いっぱい走りたと思っています。

■速水 雷亞 （走行市町：中津川市）

私は、前回のリオデジャネイロオリンピックの時は、中学二年生でした。私は、昔からレスリングをやっていて、日本のレスリング選手達が次々とメダルをとっていく姿を見てとても感動し、体がとても熱くなったのをおぼえています。自分の国でオリンピックが開催されるということは、私の人生の中で一度しかないだろうと思っていました。聖火リレーが県内で開催されることを知り、オリンピックに携わることができるチャンスだと思いました。聖火リレーとは、オリンピックを行うにあたりとても重要なことだと思っていますし、ランナーを務めることは、とても責任があることだと思っています。私が生まれ育った岐阜県中津川市の数少ない代表として、ぜひランナーをやりとげたいし、火をつないでオリンピックを成功させていきたいと思っています。精一杯頑張ります。

■鈴木 ちなみ （走行市町：多治見市）

目前となった2020年東京オリンピック！日本中が熱気に包まれることは間違いありません。世界のトップアスリートの空気を近くで感じられるのもワクワクします。

世界各国で開催されるオリンピックの中で注目する場面の一つが聖火台に点火される瞬間。その聖火をつなぐ聖火ランナーとして、生まれ育った町を走行できることをたいへん光栄に思います。

岐阜県のいろんな所を聖火が駆け抜ける感動をたくさんの方とシェアできたら嬉しいです。

■関谷 英樹 （走行市町：多治見市）

瑞穂市で富有柿を生産している柿農家です。私は本巣市で生まれ育ち、20代で地元を離れて東京で生活していましたが、2011年の東日本大震災が発生した時、職場から自宅に帰れない帰宅難民を体験。震災がきっかけで「人生いつ何が起こるか分からない。大好きな地元に戻り生活したい」と考え、岐阜にUターンしました。地元に戻ると特産品の富有柿の生産者が激減していることを知り、柿の担い手になって地元で貢献したいと考え、2012年から富有柿の発祥地・瑞穂市で農地を借りて柿農家になりました。現在は、自分の人生を変えた震災の地と繋がりたいと考え、2016年から被災地の岩手県釜石市の子どもたちに会いに行き、毎年柿を手渡しでプレゼントしています。そして岐阜県を全国・世界に広めるため、輸出にも取り組んでいます。聖火ランナーになって地元岐阜県にさらに誇りを持ち、農業に関心を持ってもらうきっかけになりたいと考え応募しました。

■田中 照代 （走行市町：多治見市）

2020東京オリンピックの聖火リレーの一員として、元気に次のランナーになぎたいと思います。競技生活も30年がたち、1996年アトランタパラリンピックでの金メダル獲得をはじめ、常に上を目指して努力してきましたが、まだまだ、やれるというところを皆さんに見ていただきたいです。応援よろしく願いいたします。

■拝戸 優馬 （走行市町：多治見市）

私は小学校6年生の頃、バレーボールに出会い多くのものを得ることができました。技術や体力はもちろんですが、仲間とボールを落とさず繋ぐことや弱気にならずチームで攻める姿勢、仲間のミスをフォローすることなどからチームワークの大切さを学び、さらには試合を観ている人に夢や希望、感動を与えることができました。そして、人に感動を与えられること、それこそがスポーツの真の魅力であることに気付きました。私は、この東京オリンピックをきっかけに周りの友人をはじめとする多くの人にスポーツの楽しさや面白さ、魅力が伝われば良いと思います。そして実際にスポーツをすることで体力の増進をはかる人が増えてくれることにも期待します。このような私の想いや願いを学校の生徒や地域の人たちに、聖火リレーという機会を通して伝えたいと考え、今回の応募に至りました。

■ゲディミナス バルブオリス （走行市町：八百津町）

Yaotsu City is a unique place of memory dedicated to Japanese diplomat Chiune Sugihara, who served as vice consul in Kaunas, Lithuania. During the Second World War, Sugihara helped six thousand Jews flee Europe by issuing transit visas to them that they could travel through Japanese territory.

The Lithuanian Parliament has approved an initiative to name 2020 the Year of Chiune Sugihara. Next year will mark the 80th anniversary of the Japanese diplomat's noble work while he resided in Kaunas. It will also be a great chance to celebrate his 120th birthday.

The Tokyo Olympic and Paralympic Games are a great chance to increase knowledge about Chiune Sugihara among Japanese people.

I look forward to carrying the sacred flame of the Tokyo Olympic and Paralympic Games, which are a festival of peace, into Gifu Prefecture, the land of Chiune Sugihara.

■塚本 明里 （走行市町：八百津町）

原因不明で治療法の確立していない3つの難病を抱えながら岐阜ご当地タレント・モデルとして活動する車椅子ユーザーです。SNS・ラジオ・テレビなどを通し、岐阜の魅力を毎日発信しています。ブログはアメブロ芸能ランキング1位になり、1日に23万アクセスを記録し、90年代モデル部門でも1位を獲得しました。地元可児市では広報大使を委嘱され、若者プロジェクトの局長として市の魅力を発信するだけでなく、地元の若者を巻き込み地域活性化活動を推進しています。また患者会を立ち上げ、難病の啓発イベントを開催しています。そして高校の課題研究の講師を務め、教育機関を中心に講演も行なっています。昨年にはミスユニバースの岐阜大会に挑戦し“WEB賞”を受賞。その様子がYahoo!ニュースになりトップページに掲載されました。病気や障がいがあっても誰もが社会参加できる世の中になることを願い、みんなの想いを乗せて聖火ランナーとして走ります。

■柘植 正巳 （走行市町：八百津町）

現在私は90歳です。1964年、前回の東京オリンピックの時は34歳でした。日本は高度成長期にさしかかり、建築ブームでもありました。私は林業に従事し、上質の東濃檜を市場に提供することで、陰ながら日本の家造りを支えてきました。広い山林の下草刈り、植林、伐採、山から木を運び出し、トラックへの積み込み、市場への運搬、そのほとんどを父親と二人で手作業でこなし、とても重労働でした。作業で大げがしたことも一度や二度ではありません。林業で有名な地域に何度も視察に出かけ、自分なりに工夫を重ね、もっと東濃檜の質を上げようと努力しました。自分が誠心誠意林業で頑張ることが日本の発展につながると信じていました。想像通りあれから日本の発展はめざましかったけれど、林業はゆっくりと衰退していきました。私が駆け抜けた人生は、苦勞の多いものでした。再びやってくる東京オリンピック。人生の記念に是非聖火を持って駆け抜けたいです。

■二十六代藤原兼房 （走行市町：八百津町）

私は関市で二十六代藤原兼房の名で刀鍛冶をしています。歴史ある刃物のまち関市に住む刀鍛冶として伝統を守っていくのはもちろんですが、新たなことにも挑戦しています。昨年には、関市を訪れる観光客を増やし関市の魅力や刃物の魅力を感じていただくために刃物屋三秀に新たに工房を作り、年間60回以上鍛錬の見学を行い、2000人以上の観光客に来ていただいております。また岐阜県が行ったミラノサローネのカーサギフⅡでは著名デザイナーとコラボして新しい日本刀を発表したり、映画スターウォーズとコラボしライトセイバーの日本刀を造り、世界中の人に日本刀の魅力を知ってもらうための活動もしています。現在、刀鍛冶として鍛錬見学、学校の授業や講演などで子どもから大人まで多くの人の中で話す機会があります。聖火ランナーで得た経験を多くの人に伝えることができると思い応募させていただきました。

■紺野 美沙子 （走行市町：郡上市）

今まで俳優として、全国の劇場の舞台に立って参りました。

どのホールにもそれぞれ歴史があります。開館までに携わった人々、運営を支える人々、そしてその舞台に立った先達の方々。一人一人の思いを想像しつつ、感謝をこめてご縁を頂いた地域の舞台に立たせて頂いています。

今回の舞台は岐阜県の路上。聖火リレーの成功のために尽力なさっている多くの皆さんの思いとともに走りたいと思っています。岐阜とのご縁に感謝します。

■簀 修子 （走行市町：郡上市）

私の頭の中に荒野の一本道を走っている聖火ランナーのイメージがある。神に捧げる聖なる火を無心に運んでいる。どんな障害があっても、ただ黙々とつないで行く、素朴で向垢な美しさ。

私は、冬季オリンピックに三度出場した。

日々、節制の積み重ねだった。選手達は、宗教や政治等の枠を越えて、同じ条件のもとでパフォーマンスを繰り広げた。勝者は称えられるべきだが、私は敗者のやり遂げた表情にむしろ感動した。オリンピックという祭典の真髄は、勝敗の彼方にある。

最高のパフォーマンスを目指して練習している選手たちが居る。彼らの夢をつなぐ聖火がある。海も山も越え、緑の野を縫い、ビルの谷間を抜け、聖火ランナーは走る。そのトーチの小さな火をあなたにつなぐ為に。

■三輪 まり子 （走行市町：郡上市）

マラソン選手になって、オリンピックに出るのが夢だった。経済的な事情もあり中学を出て就職した。夜間高校と仕事の両立。足のケガにもみまわれた。マラソン選手の夢はいつしか離れていった。ふる里郡上に戻って30年余り。今年還暦を迎へ、マラソン選手の夢は昔話しになった。しかし、走る事への情熱は消えず、いくつものフルマラソンにも出場した。ある日、郡上に聖火が来ると聞いた。幼い日の夢が蘇がえった。選手の夢は叶わなかったが、オリンピックで走れるチャンスがあるのだと全身が熱くなった。どうか私に聖火をつなげさせてください。どうか私をオリンピックに参加させてください。実績 隠岐の島ウルトラマラソン・富士山マラソン・名古屋ウィメンズマラソン・ホノルルマラソン・静岡マラソン・関シティマラソン・彦根・富山滑川・各務ヶ原・大垣・長良川・福井・岐阜清流などすべて完走。尊い聖火、確実に届けます。どうか・・・

■渡邊 一吉 （走行市町：郡上市）

私は現在、郡上市八幡町で染色業を営む者です。郡上本染 渡辺染物店は、約430年前、江戸時代の少し前の天正年間に、この郡上市に、先祖が創業しました。現在私で15代目です。毎年1月20日大寒の鯉のぼり寒ざらしを行い、手染めの鯉のぼりと、天然藍を使った藍染で作品を製作している染物屋です。岐阜県重要無形文化財の指定を受けていた父が昨年亡くなり、現在は私が継いでいます。今年3月に、郡上本染技術保持者として郡上市重要無形文化財の指定をいただき、私にとっては特別な年となりました。今後精進して伝統の染色を守り、未来にそして世界に向けて作品を製作していきたいと思っています。岐阜県、そして日本の伝統工芸が継承されていくことを祈念して、聖火ランナーとして参加させていただきたいです。

■大野 誉史 （走行市町：高山市）

私は、飛騨高山の「古い町並み」、上三之町で生まれました。幼少より、古い町並みを保存していく活動や、日本三大美祭「高山祭」に参加する中で、伝統文化を継承していくことの大切さを学んできました。また、小学校から地元の剣道道場に通い、己の体を鍛え、技と礼儀を学んできました。この度東京オリンピックの聖火が高山に通ることを知り、世界の人々に飛騨高山を知っていただく絶好の機会であると考えました。現在開催中のラグビーワールドカップでは、試合会場の至る所で日本の「礼の精神」が海外のサポーターにも伝わっています。また多くのサポーターの方々が、試合の合間を縫って高山にも訪れてくれています。私は剣道で培った礼儀正しさと、将来高山の伝統文化を継承していく人間としての誇りを胸に、堂々と聖火リレーランナーを務めたいと思います。そして、この経験を、自分の夢である地域医療に貢献できる医師を目指す原動力にしていきたいと思います。

■佐藤 弘道 （走行市町：高山市）

世界中が注目する「スポーツと平和の祭典」の日本開催が決まった瞬間から、何かに関わって多くの人へ喜びを届けることが出来たらと思っていました。その思いを「ぎふ清流国体・大会」以降様々な関わりのある第二の故郷岐阜の地で聖火ランナーとして参加出来ることを心から嬉しくかつ誇りに感じています。折しも50歳を迎えた矢先、怪我で左膝の手術を受け、その後の目標を失いかけていたとき、誰かのために「走る」という新しい目標を持つことが出来ました。人生の中で怪我を繰り返し乗り越えてきたからこそ心から思う体を動かせることの喜びや健康の大切さを今、私自身の走る姿から伝えられたらと考えています。そして、沿道の皆さんと心を一つにして、日本選手の応援と東京2020の大成功への願いを、さらには、五つの輪に咲く色とりどりの笑顔の花が、世界中の子ども達の未来の夢を広げることへ願いを込めて「清流の国ぎふ」から聖火をつなげたいと思います。

■白野 光 （走行市町：高山市）

現在、柔道形競技の日本代表選手として岐阜県高山市を拠点とし、練習、大会、そして子供達に柔道や形の指導を行っています。またオーストリア等、講師として海外選手に指導も行いました。2016 世界柔道形選手権大会で優勝し、アジア大会連覇、昨年全日本大会では、歴代最高得点で優勝しました。岐阜県から世界へ！これからを担っていく子供達に競技の楽しさや勝つ喜びを伝えていきたいと思い、日々努力しています。私は、子供達と練習していく中で一番大切にしていることがあります。笑顔で練習すること。努力を認めること。伸びたところをたくさん褒めること。子供達の努力、成長していく姿が、自分自身の努力の源になっています。柔道の形競技はオリンピック種目ではないですが、オリンピックに少しでも携われたらと思います。岐阜県から世界で活躍する選手を育てるため、これからも日々子供達と共に精進していきたいと思っています。

■流れ星 ちゅうえい （走行市町：高山市）

岐阜県出身お笑い芸人のちゅうえいといいます！普段は流れ星というコンビを組んでいて、相方瀧上（同じ岐阜県出身）と漫才をしとります！自分の得意技は一発ギャグなんですけど、こういう風に活字だと自分の良さや、面白さが皆さんに伝えられないのがものすごく残念です～（両手で顔を覆って両サイドに手を開きながら）パカンちゅうえい？こんな感じになってしまいます。今回東京オリンピックの聖火ランナーとして岐阜県を走れることに早くも感極まっております！飛騨高山は僕ら流れ星の青春時代を過ごした母校、斐太高校があり、自分達の漫才の代表作「肘祭り」から派生した肘神社がある思い出の強い街です！そんな大好きな高山市をオリンピックの聖火ランナーとして走るからには自分にとっても、地元の皆さんにとっても、自分たちを応援してくれる人達にとっても楽しい思い出となる様に一生懸命走りたいと思います～ガンダム♪

■赤梅 昭三 （走行市町：下呂市）

1964年に東京オリンピックが開催された当時、私は岐阜県陸上競技会の役員として聖火リレーの中継所に立っていました。目の前を走るランナーたちの勇姿に胸を高鳴らせたことを、昨日のことのよう覚えております。あれから56年。91歳を迎えた私ですが走る情熱は衰えることなく、生涯スポーツの実践者として日々陸上と向き合ってきました。同時に、二度目の東京オリンピックを目前に、「今度は聖火ランナーとして自分の歴史に足跡を残したい。」という気持ちが湧いてきました。「いつまで走りますか？」と聞かれたときには「走れなくなるまで走ります。」と答えています。ランナーに選ばれた際にはその気持ちを忘れず、一步一步噛みしめながら走りたいと思っております。

■大前 光市 （走行市町：下呂市）

私は、岐阜県出身でプロのダンサーをしています。24歳の時に車にひかれ義足になりましたが、その後もダンスを続け、リオデジャネイロパラリンピックの閉会式にてソロの演技をしました。今回、東京オリンピック聖火リレーのルートに、私の出身地である下呂市が選ばれたことを大変うれしく思います！オリンピック・パラリンピックを私の地元である下呂、そして岐阜県から日本、世界に向けて、大いに盛り上げたいと思っています！

■北村 祐次 （走行市町：下呂市）

私は車いすユーザーですが、普段は地元のデイサービスセンターに勤務しつつ、休みの日には岐阜県内の小・中学校で福祉講話をしたり、下呂市内の高齢者施設で「懐かしのメロディーを歌う」ボランティアをしています。福祉講話は20年で500回以上、ボランティアは5年間で250回ほど行っております。自称『岐阜県で一番アクティブな車いすユーザー』です。ちなみに昨年2月4日の読売新聞岐阜県版にも大きく取り上げていただきました。そんな岐阜県でそこそこ有名な私が中学生の息子と一緒に走っている姿を見てもらえれば、多くの方に「前向きなメッセージ」が発信できると思います。

■近藤 薫 （走行市町：下呂市）

私は青年海外協力隊として、タイのチェンマイ県で野球の普及活動を行ってきた。約二年間の活動は、スポーツフォートゥモローの一環でもあり、野球を通じて現地の方々と交流してきた。タイで野球は不人気であり、赴任当初、選手たちの実践の場は一切なかった。タイという地で野球を愛する少年たちにどうしても野球の試合をさせたいと思い、試合相手となる現地在住の日本人チームも結成し、最終的にはチェンマイ県で初の野球大会を行い、約100名のタイ人が初めて野球の試合を経験した。プレーを純粋に楽しみ、野球に魅力を感じる姿にとっても感動した。2024年のパリオリンピックでは、野球は行われぬ。世界で野球はかなりのマイナーなスポーツであるが世界にはそんな野球を愛している人々がいることも実感している。そんな、タイ及び世界の人々の思いを背負い、野球、スポーツの今後の発展、スポーツを通じた世界の平和を願い聖火ランナーに参加したい。

■後藤 寿彦 （走行市町：各務原市）

私は、岐阜県出身で、長年野球界に身を置き、現在も社会人野球部の総監督を務めています。地元を離れた現在も、岐阜県で開催されるスポーツイベントに講師やアンバサダーとしてお招きいただくなど様々な場面でご縁をいただいております。東京オリンピック聖火リレーが全国をめぐるということで、出身地である各務原市がルートに選ばれたことを大変うれしく思います。永年スポーツに携わってきた者として、オリンピック・パラリンピックを地元岐阜県から盛り上げたいと願っています。

■さくらジャパン候補 （走行市町：各務原市）

私たちは、ホッケー女子日本代表「さくらジャパン」候補です。東京2020オリンピックでは、“金メダル獲得”を目標に掲げ、勝つことにこだわって日々のトレーニングに取り組んでいます。チーム一丸となって力強い走りをお届けし、日本の皆さま、そして地元岐阜県の皆さまの思いを胸に闘う私たち「さくらジャパン」の姿を見ていただきたいです。また、東日本大震災で被災された方々への活力に繋がることを切に願います。

■中川 未由希 （走行市町：各務原市）

私は各務原市で中学生からホッケーを始め、アテネ、北京、ロンドン、リオの4大会のオリンピックに出場しました。そして選手時代18年間に渡り、ホッケーを通じて多くの方々に応援していただき、地域の皆さんに育てていただきました。選手としてのオリンピックとはまた違った、聖火ランナーという立場で東京オリンピックに携わり、生まれ育った岐阜の地で地元の方々とオリンピックを盛り上げ、皆さんと想いを共有したいと強く願っています。オリンピックには、人々を繋げ、一体となることによって生み出される熱いパワーがあると私は思っています。オリンピックの素晴らしさを体現できる聖火ランナーとしてその熱いパワーを繋ぎ、2020 東京へ、2020以降もオリンピック選手として、そして聖火ランナーとしての経験も子どもたちへ繋げていく存在になりたいと思っています。

■百瀬 翔 （走行市町：各務原市）

3歳のころからレーシングカートというモータースポーツ活動をしています。岐阜の瑞浪サーキットをホームコースとしてレース活動をしています。去年は全日本選手権ジュニアカデットクラスでシリーズ3位になりました。今はクラスもステップアップし、ジュニアマックスに参戦し、世界選手権の日本代表目指して頑張っています。夢は世界で通用するプロドライバーです。モータースポーツはまだまだマイナーなスポーツですが、人の心を揺さぶり元気の源となるエネルギー源となれるスポーツです。僕がその魅力を岐阜県から発信し、国内全体ひいては世界へ。モータースポーツの魅力を少しでも伝えていき、一人でも多くの方に伝えていきたいです。そのためにも、大好きな岐阜県で聖火ランナーをしてトーチをつないでいきたいと思っています。

■北村 一磨 (走行市町：関ヶ原町)

私は現在「関ヶ原もりあげ隊」の隊長として活動しています。町民が関ヶ原の良さを再認識することで、地元を、そしてそこに暮らす仲間をもっと好きになってもらいたいという使命のもと、町民が楽しめる環境を提供することが町の活性化に繋がるのではないかと考え、3年前に活動を始めました。手探りでのスタートで、イベントの企画や観光PRポスターの作成、また休耕田を開拓してのコスモス畑作りなどを手掛けてきました。本業は地域密着の電気屋さんで、お客様に愛され信頼される家電のホームドクターとして日々働いています。また、小学校と中学校のPTA会長を務めたり、消防団の役員、スポーツ少年団の指導者など、幅広い分野で関ヶ原町に力を注いでおります。天下分け目の関ヶ原の地で、関ヶ原もりあげ隊の隊長がランナーとして聖火を繋ぐ。「私がランナーをやらずして誰がやる」という思いで、最もふさわしい人材だと自負しております。

■田内 恒樹 (走行市町：関ヶ原町)

2011年3月11日。当時僕は3歳で、福島県双葉町立ふたば幼稚園に通っていた。その日は体調が悪く、幼稚園を休んで自宅の居間で寝ていた。午後2時46分。東日本大震災。目を覚ました時、目の前には倒れてきたブラウン管の大きなTV。あと数センチずれていたら、僕の頭はTVで押し潰されていた。原発事故の為、翌日には避難。福島県内を数ヶ所移動し、埼玉・愛知そして祖母が暮らす大垣市まで避難してきた。岐阜ではみんな親切にしてくれて、4月から入園した幼稚園でもすぐにたくさん友達ができた。小学3年生の5月、垂井町に引っ越し。その時見た垂井祭りの子供歌舞伎に感動し、来年は僕も出たいと思った。次の年、子供歌舞伎に出る事ができた。大変だったけど、とても楽しかった。その次の年もまた子供歌舞伎に出た。僕は、お世話になった岐阜の人達への感謝や、僕が生まれた福島の復興を少しでも後押しする為、聖火ランナーとして絶対走りたい。

■ 挾土 秀平 （走行市町：関ヶ原町）

私は、岐阜県高山市を拠点に職人社秀平組を営む左官職人です。これまでNHK大河ドラマ『真田丸』の題字や岐阜県郡上市にある清流長良川あゆパークのウェルカムウォールの制作等に携わってきました。現在は、東京や海外を舞台に活動することも多く、オリンピック競技会場にも左官職人として関わりも持っています。このたびオリンピックの聖火が岐阜県をめぐるということで、オリンピックを東京だけでなく岐阜県でも盛り上げたいと願っています。

■ 山本 耕史 （走行市町：関ヶ原町）

2016年のNHK大河ドラマ「真田丸」で石田三成を演じ、関ヶ原の戦いで天下を狙う徳川家康から豊臣家を守ろうとした石田三成という人物に、強い愛着を感じました。また、同年10月開催の関ヶ原でのイベントにお招きいただき、関ヶ原の戦いで石田三成が布陣した笹尾山に実際に立ち、町を埋め尽くすほどの大勢の方々の歓迎を受けたことは、今でも鮮明に覚えています。

今回、東京2020オリンピックの聖火リレーが、関ヶ原の地を走ることをお聞きし、また、地元・関ヶ原町の方々からも、関ヶ原の最終ランナーとして、聖火を掲げ、石田三成の布陣した笹尾山を登ってほしいとの熱い声援を受けて、ぜひとも、聖火ランナーとして、聖火を掲げ、関ヶ原の地を走りたいと思います。

■ANZEN 漫才 みやぞん （走行市町：大垣市）

私、ANZEN 漫才のみやぞんは、2020年4月岐阜県を、思いを込めて走ります！

桜が満開のこの時期に、スポーツを愛する一人として、希望の道をつなぐという聖火ランナーとしての役目を元気いっぱい果たします！

今回のご縁のきっかけとなった、俳句の名人の松尾芭蕉！ここで一句
ワクワクだ、春のせいかな、聖火だよ
どんな時も、明るく楽しく、
やるぞーやるぞーやるぞー！

■中嶋 茜 （走行市町：大垣市）

私は、先天性の視覚障害があり、盲学校時代に先輩の勧めで「ゴールボール」と出会いました。2012年に開催されたロンドンパラリンピック競技大会ではたくさんの応援のおかげで金メダルを取ることができました。東京オリンピック聖火リレーが全国をめぐるということで、出身地である中津川市や、現在暮らしている大垣市がルートに選ばれたことを大変うれしく思います。私がランナーを務めることにより、より多くの皆様にパラリンピックを応援していただくことができれば光栄です。オリンピック・パラリンピックを地元岐阜県から盛り上げたいと願っています。

■永松 亜舞子 （走行市町：大垣市）

小さい時、オリンピックをテレビでみていいなと思いました。聖火ランナーのトーチの火が燃えていて、それを持って走るのがカッコいいなと思いました。まさか私に聖火ランナーができるチャンスがくるとは思いませんでした。もうこんなチャンスは無いと思います。私が聖火ランナーになったら、みんなビックリすると思います。ちょっと緊張するけど、みんなを驚かせたいです。頑張って走りますのでよろしくお願いします。

■吉田 佳純 （走行市町：大垣市）

私は陸上競技をしており、昨年岐阜県で開催されたアジアジュニア選手権に出場しました。その際、県の多くの方に尽力して頂くと共に応援の声も頂き、たくさんの力を貰いました。そのおかげもあって私は結果を残すことができたと思っています。ですので、今度はそうして支えてくださった方々と直接繋がりたいですし、私が走ることで地元を盛り上げたいと思います。そして、地元の地を元気に走ることでその感謝を伝えたいと思います。

■EDNA OLLERES ONO （走行市町：羽島市）

日本に住んで40年のフィリピン人。日本人の夫と2人の娘と2人の孫がいます。元看護師でタガログ語、英語、日本語を話し、医療などの通訳もしています。岐阜市においてのフィリピン領事館出張サービスをサポートするボランティアグループ ASFIL GIFU 代表や岐阜県多文化共生推進委員をしています。日本人とフィリピン人がお互いを知り、心地よく共生できる街創りのため県や市の国際交流協会等と連携し、様々な活動を行ってきました。互いの違いを理解し認め合い、歩み寄り、協力して、より住みよい岐阜県にしていけたらと心から願っています。また、聖火ランナーとして、多文化共存を体現できたら幸いです。

■恩田 聖敬 （走行市町：羽島市）

私はサッカーJリーグFC岐阜の前社長を務めました恩田聖敬と申します。社長在任中は、サッカーで「ぎふを元気に！ぎふを一つに！」「子どもたちに夢を！」をスローガンに掲げ、岐阜県中を飛び回りました。その結果、慢性赤字体質であった財政を黒字化し、年間観客動員数の歴代記録を更新するなど、岐阜県にFC岐阜という『スポーツエンタテインメント』を根付かせる種蒔きの役割は果たせたと思います。しかし、私は難病 ALS(筋萎縮性側索硬化症)を発症し、約2年で社長退任を余儀なくされます。退任後、会社を設立して、全国で今日まで、講演・執筆活動を続けています。ALSという重度の障害者でも自分らしく生きられる、という話を主に若者たちに聞いてもらい、未来の「まちづくり」を担う「人づくり」に貢献したいと思います。私が聖火ランナーを務めることで、健常者も障害者もなく、ぎふを一つにしたいと思います。よろしくお願い致します。

■篠田 義人 （走行市町：羽島市）

33年前に交通事故で首の中樞神経である頸髄を損傷して、四肢麻痺の身体障害を抱えましたが、周りの人の支えにより仕事に就き、結婚して家庭を持ち、充実した人生を送っています。受傷前にはスポーツが得意で岐阜県立岐南工業高等学校で自転車競技部に所属していましたが、障害のある身となってからはスポーツは難しいと諦めていました。しかし、アテネ、北京のパラリンピックの陸上競技の円盤投げでメダルを獲得した、大井利江選手が自分と同じような障害で、自分よりも年齢が上であるのに活躍する姿を見て刺激を受け、2年前から始めたパラ陸上競技の座位投擲種目（円盤投げ）で、大井選手とともにパラリンピック出場を目指しています。車いすでトーチを運んでパラスポーツの素晴らしさと地元をアピールしたいと思います。

■辻本 達規 （走行市町：羽島市）

今回オリンピックのシンボルである聖火を僕が生まれ育った羽島の地をつなぐという大役を務めることができるという事で、とても嬉しく思うと同時に、大きな責任も感じております。自分に思いを託してくださった市民の皆さまの分まで一生懸命に走りたいと思います。そしてこれを機に羽島がもっと活気のあるよりよい街になっていけばいいなと思っています。自分らしく笑顔で元気一杯走り切るのを見ててください。

■伊藤 英明 （走行市町：岐阜市）

この度、岐阜県聖火ランナーのお話を頂き、岐阜出身の私として光栄に存じます。

また、東京オリンピックが開催される2020年に、NHK大河ドラマ『麒麟がくる』の斎藤義龍役で出演させて頂くことになり、主人公である明智光秀も岐阜県出身ということで大変ご縁を感じています。

東京オリンピック聖火リレーに参加させて頂くことで、清流の国ぎふの美しさを日本の方々に、そして日本の素晴らしさを世界の方々に知ってもらえるいい機会になれば、と思っております。

■杉山 陽紀 （走行市町：岐阜市）

僕は、小学5年生のとき、学校の活動である「福島応援プロジェクト」の執行部を務めました。その活動を通して、改めていじめや差別の残酷さを知り、そのようなことのない世の中を創りたいと思いました。そこで、皆が心を1つにすることができるオリンピックの聖火にこの願いを込めたいと思いました。また、その活動を通して、実際に会った被災者の方と「互いにつらいことがあっても、いろんなことに挑戦しよう」と約束し、僕は今までに学校などで積極的に活動してきました。これからも自分が努力していく決意を込めて走りたいと思いました。先日、本校元生徒会長の古田県知事が国体の聖火ランナーを高校生時代に務め、それが人生の礎になっていることを聞きました。自分もこの聖火ランナーの経験が自分の人生の中で大切なものになればと思います。以上、3つの思いが、僕が聖火ランナーに応募させていただく理由です。

■勅使川原 郁恵 （走行市町：岐阜市）

私は岐阜県出身で、冬季オリンピックではショートトラックスピードスケート日本代表選手として、長野、ソルトレイク、トリノと3度のオリンピックに出場しました。このたびオリンピックの聖火が岐阜県をめぐるということで、オリンピックとして大変嬉しく思っています。世界最大のスポーツイベント、オリンピックを東京だけでなく出身地である岐阜県からも盛り上げたいと願っています。

■日比野 克彦 （走行市町：岐阜市）

古代オリンピックは紀元前9世紀にギリシャで始まった。それは人間の美を追求するためのものであった。古代ギリシャの彫刻が人間の身体の美しさを求めたのと同じであると考え。有名な作品では「円盤を投げる人」がある、それは紀元前5世紀の彫刻家ミュロンの制作である、私は、そのころは美と身体と運動とが同じ次元で解釈されていたのだと思う。今はスポーツとアートは分類されていけれども、もともと両者は同じであったと考える。オリンピックのシンボルとなる聖火はその古代オリンピックが行われていたオリンピアのヘーラー神殿跡で採火される。そこにはきっと人間の根本的な美の精神が宿っているに違いない。その遠くの地から届いた聖火を、その遠く古代から伝わる聖火の精神をしっかりとこの手で受け取り、感じ取り、次の地へ、次の時代へ届けていきたいと思えます。